

名古屋大学教育学部

教育方法学講義II -授業分析と教育の科学化-

第14回配布資料

研究を媒介とした大学と学校との連携のあり方

－問題意識の共有と固有の役割－

※ この資料の「1. 大学と学校との連携のあり方」は、柴田の論文「問題解決指向の協同的教育実践研究のあり方」にもとづく。この論文は、柴田が参加する名古屋大学・東海市教育委員会「教育実践支援プロジェクト」の成果にもとづく。このプロジェクトの研究方法を原理的に解説したものである。初出は、的場正美ほか(2004)。

的場正美・柴田好章・山川法子・安達仁美(2004) 教育実践問題の協同的研究体制の構築—名古屋大学と東海市教育委員会の連携— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)第50巻第2号 109-123頁

1 協同的問題解決による連携の可能性

- 大学から学校現場へ
 - ・ 教師教育(教員養成)
 - ・ 学部卒業生が教員として現場へ
 - ・ 現職教員の大学院在学(名古屋大学教育発達科学研究科の場合)
 - ・ 大学院昼夜開講制
 - ・ 博士前期課程 高度専門職業人養成コース
 - ・ 博士後期課程の進学者も増加傾向
 - ・ 大学院就学休業制度の利用者もみられる
- 大学教員が学校へ
 - ・ 講師・指導助言者
 - ・ 学校、教育委員会
 - ・ 民間教育研究団体

- これまでの問題点
 - ・ 多様な連携が図られてきたが、
 - ・ 大学教官が有する高度な専門性や、組織としての大学の知的リソースが、連携の基礎として期待されながらも、大学で行われる研究の成果が現場で活用され、また活用されることによって大学での研究が進展するというようなサイクルが形成されてこなかった。
 - ・ 大学に現職教員が在学して研究を行う場合は、組織的、継続的な指導がなされるのではあるが、問題意識などは現場から得られたものであったとしても、大学の研究の文脈の中で現職教員は研究を行うことになり、大学と現場の研究課題に隔たりが出てくる。
 - 教育実践研究を通じた大学と現場の連携
 - ・ 大学で行われる研究の成果が現場で活用され、また活用されることによって大学での研究が進展するというサイクル
 - ・ 第1 教育実践現場の問題解決に役立つ研究の強化
 - ・ 第2 実践現場の研究と大学の研究のそれぞれ固有の役割
 - ・ 実践の中で問題がなぜ問題と認識されるのか、すなわち問題のみならず問題が問題とされる地平を対象化し、そこからあるべき姿を描いていくことも、大学における研究の重要な使命
 - 連携の基盤としての協同的問題解決
 - ・ 大学と教育実践現場の協同にもとづいて、問題解決型の研究を推進
 - ・ 問題を協同で発掘し、共有し、ともに解決の糸口を探していくプロセス
- ### 2 協同参加型の研究プロジェクト
- 事実に基づく授業分析と参加・協同
 - ・ 授業分析が最も重視しているのは、授業の事実から出発する点
 - ・ 既存の特定の理論から一方的に授業をとらえない
 - ・ 理論と整合する事実のみに注目しない
 - ・ あるがままの子どもの学びのあり方をとらえることを基本原理
 - 権威主義的に授業の評定を行うことを排除する原理でもある。
 - ・ 研究に参加する人たちが、互いの立場を尊重しながら、事実に基づいた議論を行うことが、生産的な協同のためには不可欠

○ 研究授業の問題点

従来からも、こうした方向で、現職教育としての校内研究会などでは、研究授業の公開と、公開された授業に基づく検討会が続けられてきた。学校の現職教育や研究指定として、ほとんどの学校がこのような授業研究に取り組んでいる。

しかしながら、研究授業を行うこと自体が目的化され、研究授業が形骸化してきている側面も否めない。たとえば、経験に富んだ教師からの示唆が、一方向的な批難として授業者に感じられたり、逆に当たり障りのないことを言い合ったりするというような雰囲気形成されることもある。

こうした背景としては、教師個々の問題というよりも、組織としての構造的な問題に目を向けるべきであろう。ほとんどの教師は、高い職業意識に支えられ、日々よりよい授業の実現を求めて努力している。自己実現のために豊かな教育実践を希求しているという点で、教職員集団には、同じ目的が共有されているといえる。

問題は、教師と教師をつなぐ関係性にあるのである。

○ 克服するための集団作業

・ 授業観察・記録作成・討議を集団作業として行うワークショップ

・ 授業研究会では、各人の立場からの授業観察における気づきをもちよることによって、協同して大きな授業記録を作り上げていき、それを通して、問題の発見、共有、解決の糸口を導出。

問題解決指向、協同参加型という特徴をもった教育実践研究を推進することを通して、大学と教育実践現場が、またそこに関わるすべての人たちが連携しながら、明日の教育実践を切り開いていくことを構想。